

炎症性腸疾患に対する新薬の特集

第六弾 ゼルヤンツ®錠

新薬特集第六弾は新規作用機序を持つ潰瘍性大腸炎の内服薬 ゼルヤンツ®錠について紹介します。



特徴

2018年5月、以前より関節リウマチの治療に使用されているゼルヤンツ®錠（有効成分：トファシチニブ）が潰瘍性大腸炎の治療薬として加わりました。炎症性腸疾患ではインターロイキン(IL)やTNF α といった炎症を起こす物質（炎症性サイトカイン）が過剰に産生、または過剰に作用することで腸に炎症が起こったり、続いたりすることがわかってきており、そこをターゲットとする薬剤の開発が多数進められています。レミケード®やヒュミラ®、ステラーラ®などの薬剤は、それぞれTNF α やIL12/23 p40といった既に産生されたサイトカインの働きを抑える薬剤ですが、ゼルヤンツ®は、白血球内でヤヌスキナーゼ（JAK）という、サイトカイン産生に重要な酵素の働きを抑制し、サイトカインの産生自体を抑えることで効果を発揮します。

治療選択肢としての位置づけは現在のところ明確には定まってはいませんが、中等症から重症の潰瘍性大腸炎であり、ステロイドをはじめとした既存治療でのコントロールが困難な方が対象となります。

サイトカインの産生を抑制する内服薬としてプログラフ®カプセル(タクロリムス)がありますが、原則として寛解導入療法に使用し3ヶ月しか使用できません。一方、ゼルヤンツは寛解導入療法だけではなく寛解維持療法にも使用できる内服薬として期待されています。

使用方法と注意点

寛解導入療法では、通常1回10mg（2錠）を1日2回 8週間（効果不十分な場合はさらに8週間）服用します。また寛解維持療法では、通常1回5mg（1錠）を1日2回服用します。維持療法中に効果が減弱した方や過去の治療において難治性と考えられる方では維持療法においても1回10mgの1日2回投与に増量して服用可能です。また、腎機能や肝機能に応じて減量する場合があります。

大きな副作用は報告されていませんが、他の免疫に作用する薬剤と同様に感染症に注意が必要で、特に帯状疱疹にかかりやすくなるとされています。帯状疱疹は水痘ウイルスが原因となりますが、顔や体などに痛みがあり水疱を伴う皮疹を帯状に生じます。発症早期に治療することが重要ですので初期症状に注意しましょう。

次回は今年7月に承認されたエンタイビオ®について紹介します。（文責：薬剤部 八木澤 啓司）